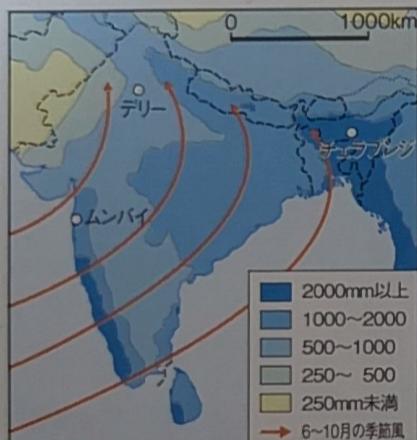




▲② 南アジアの地形(Diercke Weltatlas 2008,ほか)

◀① ヴァラナシを流れるガンジス川(インド)

●地域の考察方法● 南アジアでは、言語や宗教が多岐にわたり、伝統的な制度や価値観も強く残っている。その一方で、急速に経済発展が進む都市部や工業地域では、生活のようすが変わりつつある。この節では、文化・宗教や産業など地域を構成するさまざまな事象を項目ごとに整理して、考察していく。



▲③ 南アジアの年降水量(CRUデータ)
読図 多雨地域の地形の特徴を考えよう。

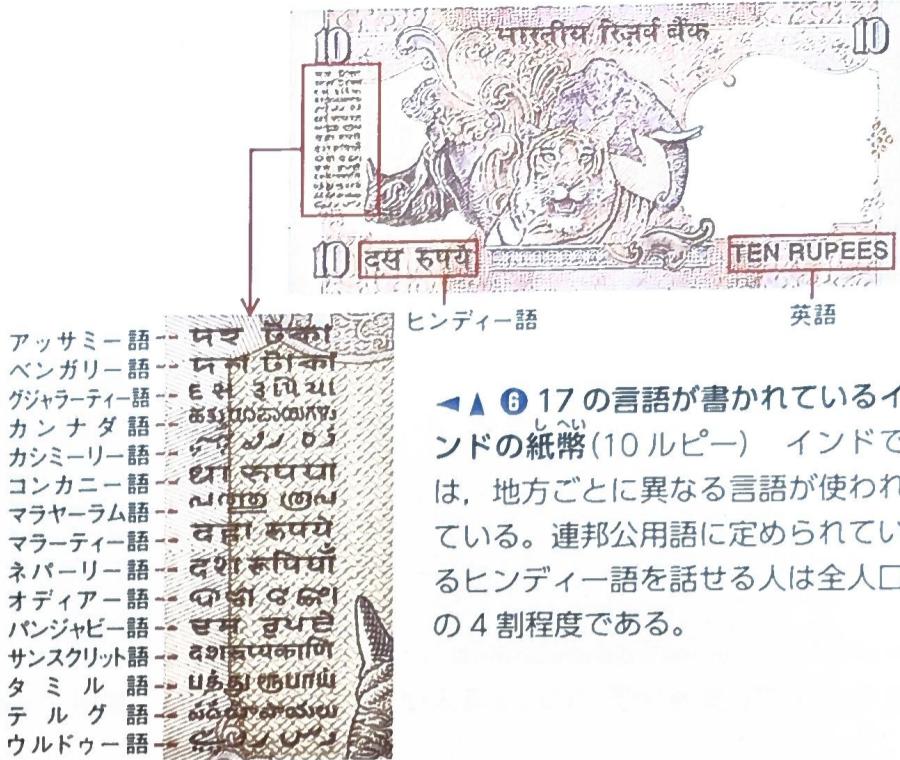
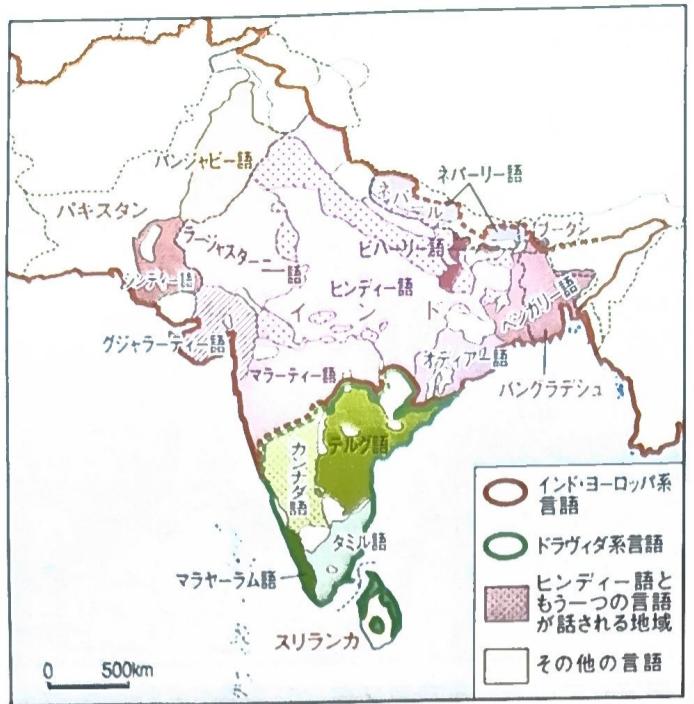


▲④ 冠水したダッカ中心部(バングラデシュ、2014年6月撮影) ガンジス川下流の三角州(デルタ)地帯に位置するダッカは、雨季になると大規模な洪水に見舞われることが多い。

●三つに分けられる地形とモンスーンの影響を受ける気候

南アジアの地形は、大きく三つに区分される。北部は新期造山帶^(→ p.34)に属しており、急峻なヒマラヤ山脈がはしる。中部には、ヒマラヤ山脈から流れるインダス川やガンジス川などの大河川の堆積作用によってインダス平原とヒンドスタン平原が形成されている。ガンジス川は河口付近でブラマプトラ川と合流して三角州を形成する。南部のインド半島は、かつてのゴンドワナ大陸の一部で安定陸塊^(→ p.31 ③)となっており、平坦なデカン高原が広がる。デカン高原には、レグル^(→ p.73)とよばれる玄武岩由来の肥沃な黒土が分布する。

南アジアでは、季節風(モンスーン)^(→ p.53)の影響によって、雨季と乾季^(→ p.53)が明瞭に分かれる地域が多いことに加え、地域による降水量の差異も大きい。降水の大部分が6～10月に南西方向から吹き込む季節風によってもたらされ、この時期が雨季となる。南西の季節風は、インド洋上で多量の水分を含んだ湿った風であり、これが山脈や丘陵を越える際に大量の雨を降らせる。そのため、インド半島の西海岸では降水量が多く熱帯雨林^(→ p.60)がみられるが、内陸のデカン高原では降水量が少なくなり、サバナが卓越する。また、北東部のヒマラヤ山脈の山ろくは世界的な多雨地域であるのに対して、西へ行くほど降水量は減少し、インドとパキスタンの国境付近は乾燥した気候となり、大インド(タール)砂漠^(→ p.60)もみられる。



1 南アジアの歩みとヒンドゥー教

南アジアの成り立ち

南アジアは、インダス文明にさかのぼる古い歴史をもち、ヒンドゥー教を中心とした社会が、イスラームやほかの宗教を信仰する人々と共に共生してきた。18世紀に始まる

イギリスの進出によって、ネパールとブータンを除く南アジアは同5 国の植民地支配を受け、綿花・香辛料・茶などの供給地となっこうしんりょうた。第二次世界大戦後の1947年には、ヒンドゥー教徒を中心とする印度連邦と、ムスリムの多いパキスタンがそれぞれ別の国としてイギリスから独立した。パキスタンの飛び地であった東パキスタンは、1971年にバングラデシュとして再度の独立を果たした。インドと10 パキスタンの間には、独立時のカシミール地方をめぐる領土問題が未解決のまま残され、その領有をめぐってこれまでに3度の戦争が勃発し、現在でも対立が続いている。1948年に独立したスリランカ(当時のセイロン)では、多数派で仏教徒であるシンハラ人に対して政府が優遇政策を進めてきた。そのため、北部に多いヒンドゥー15 教徒のタミル人との間で内戦状態にあったが、2009年に終結し、復興が進んでいる。

多様な言語と宗教

インドには12億をこえる人々が住み、数百の言語が用いられている。北部と中部ではインド・ヨーロッパ系言語、南部ではドラヴィダ系言語がおもに話され、州境も主要言語の分布にもとづいて引かれている。このように多くの言語が使われているため、インドの紙幣には、主要な17の言語が表示されている。インドでは連邦公用語であるヒンディー語を話す人が

リード

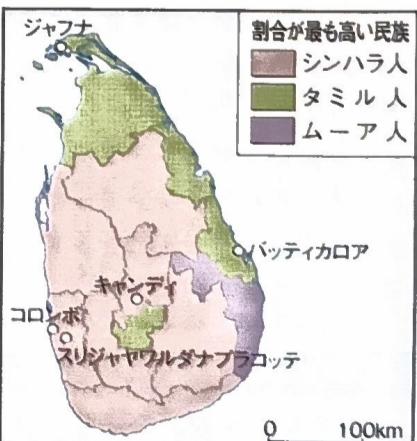
南アジアの複雑な言語・民族分布や、独特の社会制度について、植民地支配の歴史や宗教とのかかわりからみていこう。

リンク→

発展途上国の人口問題(p.172)
生活と宗教のかかわり(p.211)

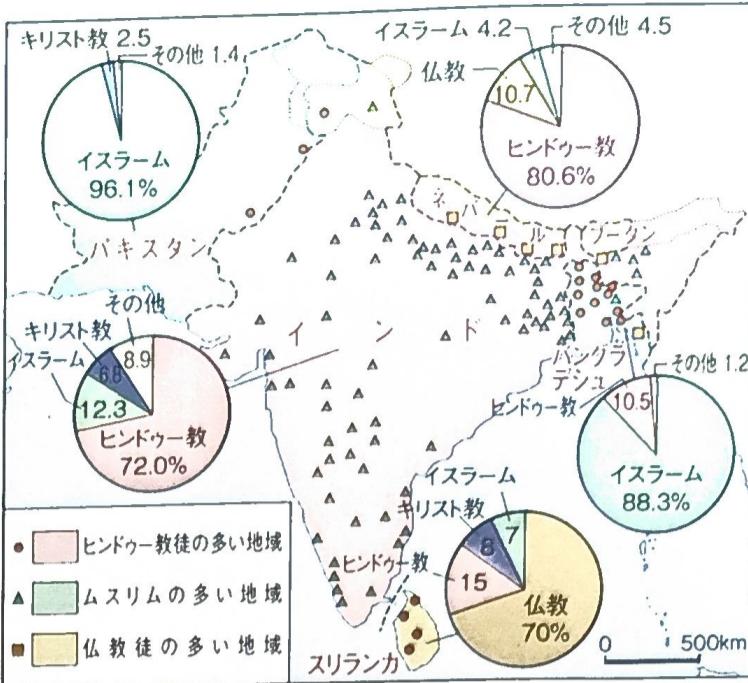
年	事項
1498	ヴァスコ=ダ=ガマ、海路でインドに到達—ヨーロッパ人の進出始まる
1854	イギリス人によりアッサム地方で茶の栽培始まる
1877	イギリスのヴィクトリア女王、インド皇帝を宣言
1930年代	ガンジーにより、独立運動が全国的に広がる
1947	インド連邦・パキスタン独立、カシミール帰属をめぐってインド・パキスタン戦争起こる
1948	スリランカ独立
1962	インド・中国国境紛争
1971	バングラデシュ独立
1991	インド、新経済政策導入—経済自由化でICT産業など急速に発展

▲⑦ 南アジアの歩み



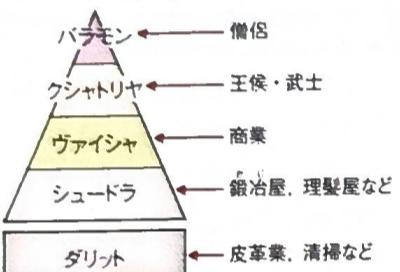


▲① 洗濯屋のジャーティに属する人々(ムンバイ, 2012年撮影)



▲② 南アジアにおける宗教分布(Alexander Kombiatlas 2003, ほか) 読図 国による宗教の違いに着目しよう。

ヴァルナ(身分) ジャーティ(社会集団)



▲③ ヴァルナとジャーティ

① ヴァルナの枠外におかれた最下層民で、社会生活のすべての面で差別されてきた。憲法で不可触民制は廃止されたが、今もなお差別が根強く残っている。

用語解説

■ カースト制 ジャーティ(職を同じくする社会集団)間の分業関係とヴァルナ(身分枠)による上下関係を結合した、インド特有の身分制度のこと。「カースト」はインドの言葉ではなく、ポルトガル語で血統を意味する「カスタ」に由来する。ポルトガル人は、ヴァルナとジャーティを区別せずにカスタとしてとらえ、それがインドでみられる社会関係、社会集団を表す言葉として定着した。

チェック

- 1) 南アジアが複数の国家に分かれた理由を説明しよう。
- 2) インドで英語が共通語になった理由を説明しよう。

最も多いが、北部での使用に限られているため、英語がインドの共通語としての役割を果たしている。近年では、経済のグローバル化によって英語の地位はさらに高まり、幼少時から英語で教育を受けた子供が増えている。

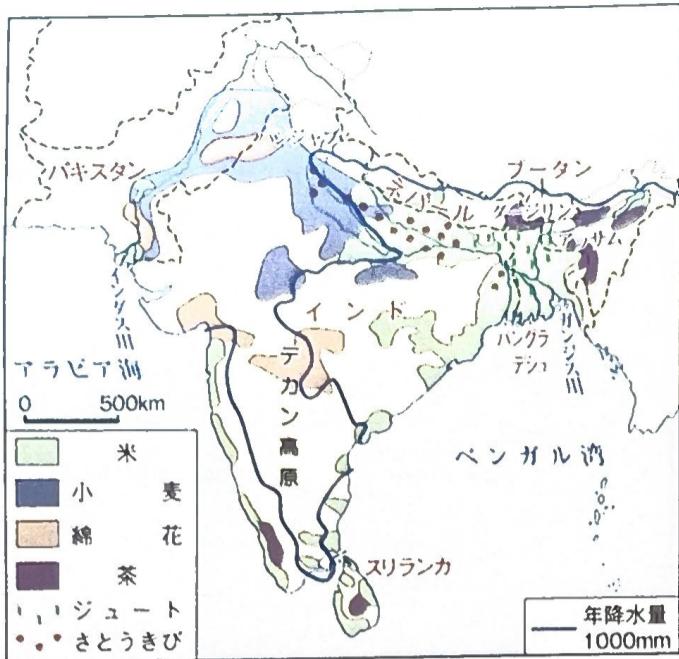
インドは、さまざまな宗教を生み出した国でもある。ヒンドゥー教徒が全体の7割をこえるが、ムスリムやキリスト教徒もあり、仏教やジャイナ教、シク教もこの地におこった。このように、多様な宗教を抱え、また分離・独立の際に宗教間の対立に苦しんだインドは、特定の宗教を国教とせず、信仰の自由を尊重している。

ヒンドゥー教と人々の生活

ヒンドゥー社会は、古くからバラモン(祭司)・クシャトリヤ(王族・武士)・ヴァイシャ(庶民)・

シュードラ(隸属民)という4身分(ヴァルナ)と、その下に位置づけられるダリット(不可触民)からなっていた。ヒンドゥー教徒の生活や営みは、このヴァルナによる身分枠とともに、各自が生まれながらに属するジャーティとよばれる社会集団によって規定してきた。

ジャーティには、生まれを同じくする者の集団という意味があり、祖先が同じだと信じて、婚姻はその集団内で行う。また、各ジャーティは特定の伝統的な職業に従事することが多く、ジャーティ間の分業によって地域社会が維持してきた。これがカースト制とよばれる身分制度の基本構造である。社会生活や儀礼の場で、下位カーストは上位カーストから日常的に差別を受けてきたが、今日では憲法によってカーストによる身分差別は禁止され、職業選択の自由も認められている。婚姻の自由も保障されているが、伝統的な慣習にもとづく結婚が依然として主流である。



▲④ 南アジアの農業(Alexander Kombiatlas 2003, ほか) 読図 降水量と作物の関係に着目しよう。



▲⑤ 茶葉の摘み取り作業(ダージリン, 4月撮影) 標高2000mをこえる高地で、手作業で収穫される。

2 インドの農業と農村の変化

自然と農業のかかわり

インドではさまざまな農業がみられるが、一般的に、年降水量が1000mmをこえる地域では稲作が農業の中心であり、ヒンドスタン平原や沿岸部の沖積平野が代表的な稲作地帯となっている。年降水量が1000mm未満の地域を見ると、インド北部では小麦が穀物栽培の中心であり、とくにパンジャーブ地方は世界的な小麦産地として知られる。近年は、綿花の栽培もさかんである。レギールが分布するデカン高原では、乾燥した気候に適した綿花やソルガム(もろこし)、大豆などが栽培されている。

降水量の多いダージリン地方やアッサム地方の丘陵地では、プランテーションによる茶の栽培がさかんである。

農業の発展と人々の生活

インドは長く食料の不足に悩まされてきたが、1960年代に、緑の革命とよばれる高収量品種の

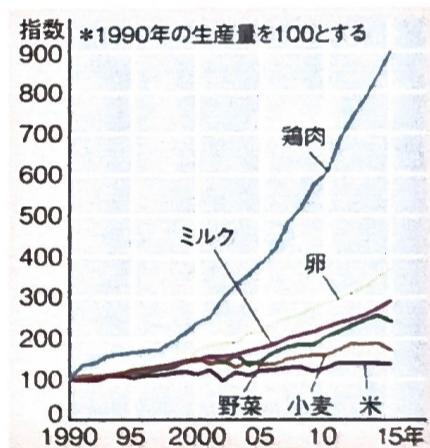
(→p.102)
導入を中心とした技術革新を行い、農業生産が飛躍的に増加した。1970年代には食料の自給を達成し、米と小麦の生産量は、中国についてともに世界第2位である。^(2012年)高収量品種の栽培には、安定した水の供給と肥料が必要であり、井戸や用水路による灌漑や化学肥料が普及した。しかし、このことは農業生産にかかる費用の増加を招き、それを負担できる農民がさらに裕福になる一方で、零細農民や土地をもたない農民にはその恩恵が少なく、貧富の格差を拡大させた。近年では、経済成長に伴い、穀物ばかりでなくミルクや鶏肉、^{とりにく}鶏卵、野菜類の需要が高まり、生産ものびている。とくにミルク生産の増加は、白い革命とよばれ注目されている。

リード

インドの農業を自然環境・社会環境との関係からみていこう。

リンク→

各地にみられる伝統的農業(p.96)



▲⑥ インドにおけるおもな農作物の生産量の推移(FAOSTAT)

用語解説

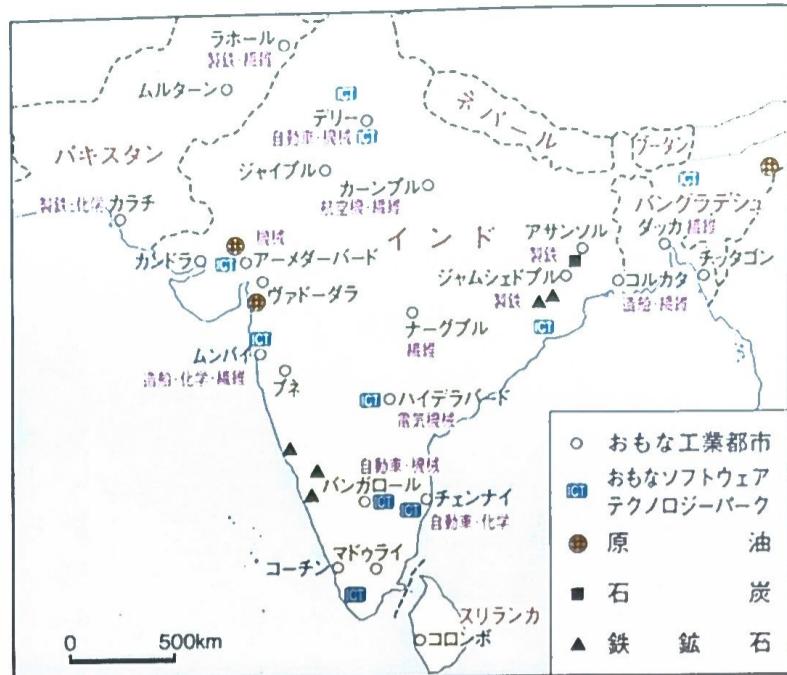
2 白い革命 インドには菜食主義者が多いため、従来からミルクがたんぱく源として重要であった。近年では、経済成長により飲用のほか、各種乳製品の原料としての消費が急増しており、白い革命とよばれている。また、インドのミルク生産は水牛への依存度が高いことも特徴がある。

チェック

緑の革命は農民の生活にどのような影響を与えたのだろうか。



▲① ジャムシェドプルの製鉄所(インド)



▲② 南アジアの鉱工業(Diercke Weltatlas 2008, ほか)

読図 鉱産資源と工業のかかわりに着目しよう。

リード

図②からはICT産業がインド各地に展開していることがわかる。なぜインドでICT産業が発達したのだろうか。インドの工業の発展をみていこう。

リンク→

BRICSの工業化と後発工業国(p.143)

プラスα

繊維工業が急成長する バングラデシュ

バングラデシュでは、縫製業を中心とした繊維工業が急成長している。縫製業は豊富な労働力と人件費の安さが重要な立地因子となる。この点から、約1億5000万の人口があり、賃金も中国の5分の1ほどであるバングラデシュが注目されるようになった。国内にある5000以上の工場の主体は地元企業であり、外国企業から委託を受けて衣服や靴などを生産している。



▲③ 衣服工場のようす(バングラデシュ, ダッカ, 2014年撮影)

3 発展するインドの産業と変化

成長する インドの工業

インドでは、イギリスの植民地時代に綿工業や製鉄業などを中心に近代的な工業がおこった。独立後は、市場経済と計画経済をあわせた混合経済体制を採用し、外

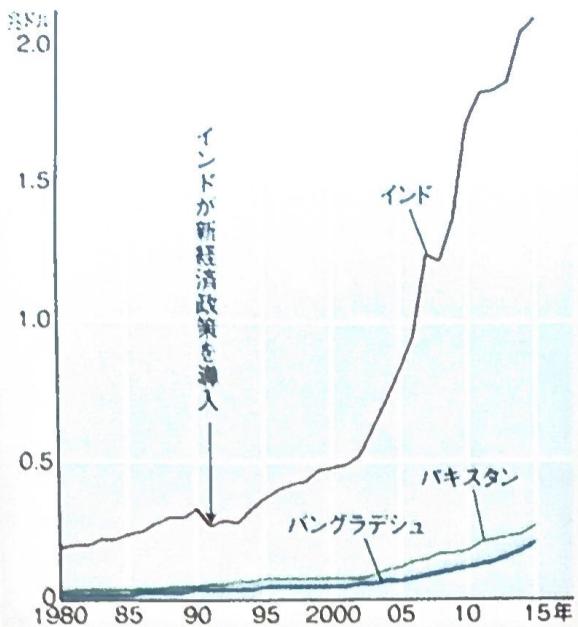
(p.233)

国からの輸入を制限して、鉄鉱石・石炭などの豊かな鉱産資源を用いて自給自足型の工業発展をめざした。1970年ごろには、自動車・航空機から文房具・サンダルにいたるまで、ほぼあらゆる種類の製品を国内生産する体制をつくりあげた。しかし、基幹工業を担った公営企業のなかには、効率の悪い企業もあり、また外国資本を排除したため技術革新が大幅に遅れ、国際競争力が失われた。

そこで、政府は1980年代から経済の統制を少しずつゆるめ、1991年には新経済政策を導入して、経済の自由化を本格的に進めた。

(p.257)

これにより企業の設立や活動が自由となり、100%外国資本による事業も可能となったことで、工業生産は急速な成長をみせた。とくに、自動車生産の伸びは著しく、デリーやチェンナイなどが生産の中心となっている。こうした大都市の郊外に開発された大規模工業団地には、国内企業に加えて、欧米や日本、韓国など、外国資本の企業が多数進出している。また業種をみても、自動車のほか、電気機器や医薬品、食料品など多岐にわたっている。このような工業化は、新中間層とよばれる比較的所得が高い人々を生み出し、彼らが購買者となることで次なる投資をよび込むという経済成長の回路が出現している。これらのことから、インドは、有望な市場として期待されており、BRICSの一国として世界の注目を集めている。



▲④ 南アジアのおもな国のGDPの推移(IMF 資料) ▲⑤ ソフトウェア開発会社のようす(バンガロール、2012年撮影)



急成長する ICT 産業

現在のインドでは、情報通信技術(ICT)産業が急速に発展し、経済成長を牽引する重要な産業となっ

(→ p.137)

ている。インドはもともと数学やコンピュータ技術の教育に入れており、かつイギリスの植民地であった歴史から英語が堪能な人材が多い。当初はアメリカ合衆国などへ技術者が渡り、ソフトウェアの開発にたずさわっていたが、現在はインド国内での生産が主流となっている。一般的な工業とは異なり、ICT 産業は原材料や製品の運搬を伴わず、道路や鉄道を整備する必要がない。外国からの受注や製品の輸出はインターネットを使って即座にできる。また、時差を利用すれば、最大の市場であるアメリカ合衆国が夜の間に仕事を引きついで、両国間で24時間連続したソフトウェアの開発・作成が可能である。バンガロールやデリーをはじめ、多くの都市にソフトウェアテクノロジーパークが整備されるなど、国や州が積極的な政策をとっていることも、インドのICT 産業の成長に寄与している。

経済成長と 生活の変化

ICT 産業の成長や外資の積極的な導入は、伝統や慣習を重視するこれまでの生活様式に変化をもたらしている。ICT 産業などの新しい産業の多くは、従来のジャーティ間の分業によらない仕事である。そうした職に就き高給を得る新中

間層の人々のなかには、欧米風の生活様式を取り入れて、職場ではスーツやワイシャツを着用し、Tシャツやジーンズで外食やショッピングを楽しむ者もいる。都市部には、外国のブランド店やファストフード店が進出しており、その手法をまねた地元資本によるチェーン店も登場するなど、新たな消費文化が広まっている。

→⑥

けんいん

→⑦

たんのう

→⑧

→⑨

→⑩

→⑪

→⑫

→⑬

→⑭

→⑮

→⑯

→⑰

→⑱

→⑲

→⑳

→㉑

→㉒

→㉓

→㉔

→㉕

→㉖

→㉗

→㉘

→㉙

→㉚

→㉛

→㉜

→㉝

→㉞

→㉟

→㉟

→㉟

→㉟

→㉟

→㉟

→㉟

→㉟

→㉟

→㉟

→㉟

→㉟

→㉟

→㉟

→㉟

→㉟

→㉟

→㉟

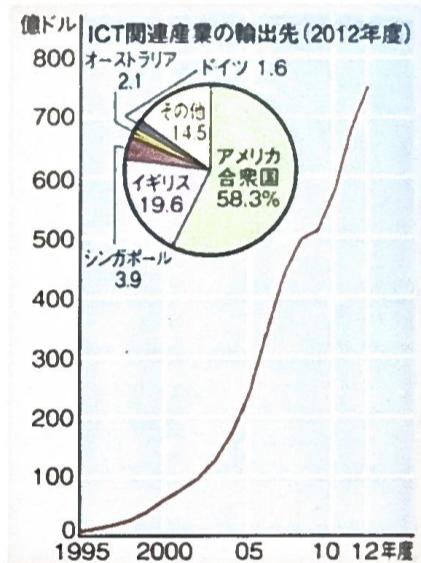
→㉟

→㉟

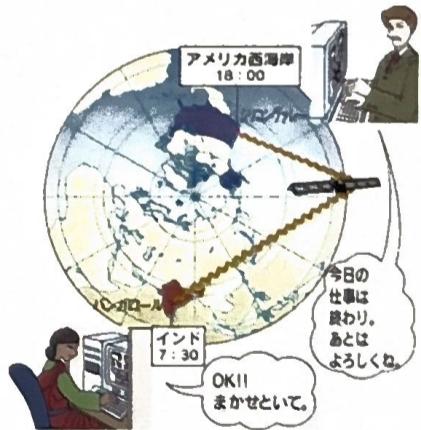
→㉟

→㉟

→㉟



▲⑥ インドのICT関連産業の輸出額の変化と輸出先(ESC 資料)



▲⑦ アメリカ合衆国との仕事のやりとり

チェック

1980年代まで低迷していたインドの工業は、どのようにして成長したのだろうか。